

大学・短期大学における東日本大震災の支援活動と意義

A Significance of Supporting Activities for the Great East Japan Earthquake in Uekusa Gakuen University and Junior College

松原 敬子¹ 清宮 宏臣² 浅川 繭子³
永原 久栄⁴ 中坪 晃一⁵ 高倉 誠一⁶

東日本大震災を受け、植草学園では各校園をあげて震災支援活動を行った。その中の一つである植草学園大学・植草学園短期大学の取り組みを取り上げ、振り返るとともに意義も含めて総括することを目的とした。

震災支援に関わる活動は、活動それ自体が大きな意義をもつものである。加えて、学生にとっては貴重な経験となり、大学・短期大学にとっては、協同的取り組みの一端となった。この活動が、大学・短期大学にとって、今後の活動展開の礎ともなることが期待される。

キーワード：東日本大震災、震災支援活動、意義

1. 問題と目的

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、未曾有の被害をもたらした。この大震災を受けて、植草学園では、法人設置の各校園により震災後比較的早い時期から支援活動を開始した。主な取り組みは、①電力エネルギーの節約、②義援金の呼びかけと送金、③被災した植草学園学生・生徒への支援－見舞金の贈呈、学費減免措置など、④義援物資の収集と送付、⑤教員の専門性を生かした支援（介護支援活動）等々である。

同時に、学園の生徒・学生による支援も活発に開始された。附属高等学校では、福島県から近隣の小学校に避難した児童に向け、吹奏楽部、バトントワリング部などが演奏やダンスを披露、吹奏楽部は千葉駅前にてチャリティーコンサートを実施した。

短期大学では、4月に震災支援をテーマに、義援物資や義援金の収集や災害時対応等のイベントを実施した。こうした学園一体の支援活動の高まりを受け、大学・短期大学合同での宮城県南三陸町での現地支援活動にも発展した。

そこで、本稿では、学園における震災支援活動を

めぐって、大学・短期大学による南三陸町での現地支援活動を中心にその意義について考察する。また、この活動は、学園の取り組みの一つであるので、大学・短期大学と学園という視点からも、この活動の意義について検討を加える。

2. 南三陸町での現地支援活動の概要

(1) 経緯

震災は大学・短期大学にも及んだが、施設等の被害にとどまり、幸いなことに学生・教職員への直接的な被害はなかった。大学・短期大学では、通常通り授業が開始されたが、だれもが「なにかできることを」と落ち着かない心情であったように思う。こうしたこともあり、4月に予定されていた交流行事を急遽、震災支援活動に切り替えて義援物資等の収集を行ったことは上述の通りである。支援活動の高まりを受け、学生からも「現地に行ってなにかできることを」という声があがるようになった。

そこで、学生委員会を中心に、現地での震災支援活動の可能性を模索することとなった。まず、授業や実習等の狭間で支援活動ができる期間を探り、実

1, 2, 3, 5, 6 植草学園短期大学

4 植草学園大学

施の目安を8月上旬とし、その後、支援活動先の選定・確保や宿泊先の手配等を行った。これら、大学・短期大学として現地での支援活動を行うことについては、大学・短期大学として異論なく、むしろ、積極的な支援を受けて準備を進めることができた。

(2) 活動の概要

1) 日程

平成23年8月2日（火）～8月5日（金）

4日間（3泊4日 ※車中1泊）

8/2(火)	1日目	現地への移動日（10：00出発～夕方18：00頃宿泊先到着）
8/3(水)	2日目	支援活動日（9：00～16：00）
8/4(木)	3日目	支援活動日（9：00～16：00） 活動終了後、入浴施設にて入浴、夕食、休憩ほか。 22：00頃現地出発（車中泊）。
8/5(金)	4日目	帰途の移動日（早朝5：00頃到着）

2) 活動場所

南三陸町災害ボランティアセンター（宮城県本吉郡南三陸町志津川字沼田56）

3) 参加人数

学生40名、教員6名、計46名

4) 宿泊先

丘のホテル（宮城県仙台市宮城野区榴ヶ岡21）

5) 活動内容

公立志津川病院にて2日間、瓦礫の撤去や分別（医療器具や個人情報に関するものも含む）を行う。

3. 学生の感想に見る意義

支援活動は、活動そのものに意義がある。一方で、現地での活動は、自分の目で見て、体験することで、その人の生き方に関わる貴重な経験にもなる。ここでは、学生が寄せた感想文を紹介しながら、この活動の意義について考えてみたい。

(1) 「メディアを通して見る」と「自分の目で見る」ことに関する感想

- ・「テレビの画面を通しての景色が目にあるという事実、最初は全く実感が湧きませんでした。（中略）壊滅的な情景を見てただ愕然とするだけでした」
- ・「テレビの画面ではなく『自分の目・耳』で南三陸町

という町を見たときには自然と涙が出ました」

- ・「本当にテレビで見た風景がありました」
- ・「実際にこの目で見て、本当に現実に起こったことなのだと改めて思い悲しかったです」
- ・「ニュースで被災地の様子を何度も見たが、自分の目で見ることで被害の大きさを改めて感じた」
- ・「映像や画像で見ると実際に自分の目で見るのでは感じ方が違うと思いました。（中略）ただテレビなどで見て『ひどいな……』と思うだけでなく、他人事のように思わず、日本で起きたことをしっかりと受け止め、（後略）」
- ・「写真や映像を見ることは容易である。（中略）『テレビと同じだ』などと思うだろう。確かに同じではある。しかし、写真や映像で見るものと自分の目で見る光景が違うことをわかってもらいたい」

新聞をはじめとして、テレビやインターネットといったメディアの発達によって、より瞬時に被災地の様子を知ることができるようになった。このようなメディアを通して、地震や津波が発生したこと、そのことによって甚大な被害が出たことは、だれもが知っている周知の事実である。しかし、被災地に赴いた学生の多くは、「メディアを通して見て知っていた事実」と「実際に自分の目で見た現実」とを比較し、その違いを感じていたように思われる。また、起きた出来事を、より身近なものとして捉えなおしているように思われる。

(2) 「物から思いを馳せる」ことに関する感想

- ・「患者さんのカルテ、携帯電話、お金、（中略）他にも衣服や子どものおもちゃなどもあり、あの時間ここではどうなっていたのかと考えるととても怖いものがありました。誰もこのようなことになるとは思いません」
- ・「患者さんの私物やカルテ、（中略）子どものカバンやぬいぐるみが見つかるたびに悲しい気持ちになりました。病院に入院して動けなかった人や逃げることのできなかつた職員の人たちは津波が目の前まできたときはどんな気持ちだったのだろうとずっと考えていました」
- ・「個人情報や衣類やお金などが出てきて、皆が必死になって逃げていたのだと思いました」
- ・「思い出の写真などが出てきたときも、“この方は大

「丈夫だったのか」と考えていました」

- ・「汚れたキティちゃんのぬいぐるみと野球ボールがありました。それを見たとき、胸が詰まりとても苦しくなりました」
- ・「写真や年賀状、葉書、指輪や学生服など、たくさんものが海水がしみこんでいたり、(中略)その全部が、私の何かが熱くなったり、悲しくなったりしました」
- ・「(前略)ぬいぐるみ、絵本などがあつた。私はそれを見るたびにその子は、その人は、ちゃんと生きているのかな、逃げられたのかなと何度も思った」
- ・「ところどころに見える日常の道具や身につけるもの、日用品などを見つけると胸が熱くなりました」

支援活動では、病院内の瓦礫の撤去、泥のかき出しやゴミの分別などをさせていただいた。活動の際に目にする物の中には、入院されていた人の物と思われる日用品、洋服、ぬいぐるみや写真などがあつた。学生たちは、実際にそれらを手に取り、一つ一つを丁寧に分別していった。このような過程を通じて、その物の一つ一つから、その持ち主への思いを馳せている。しかも、思いを馳せている相手は、実際には話をしたこともない、会ったこともない人である。

普段の生活においても、物から人に思いを馳せるという機会はあるかもしれない。しかし、物があふれている昨今において、会ったこともない、話をしたこともない人に思いを馳せる機会はそう多くはないと思われる。実際に泥まみれになった私物を手に取り、片付けをさせていただくことを通じて、そこに残された物から人への思いを感じる機会をいただいた。また、震災による被害のありようを、より個人レベルで、より自分に引き寄せて考えられているように思われる。

(3) 「つながること」「力を合わせること」ことに関する感想

- ・「(前略)助け合いの心を持つ人がたくさんいるということです。(中略)他の遠い地域からボランティアをするためにこの場所に来ているボランティアの方をたくさん見かけました(中略)助け合うことは、気持ちがあれば誰にでもできることなのだと思います」

- ・「現地で活動しているスタッフの方も地方から来て長期間活動をしていることを知り、人のあたたかさを感じることもできたし、ホテルの従業員の方の明るさで、逆に私たちが元気をもらえたように感じました」
- ・「私達学生ボランティアが実際に現場を体感し、気持ち落ち込み過ぎないように、リーダーさん達の言動一つひとつに優しさがありました」
- ・「もっとたくさんのボランティアの方の協力が必要だということを感じました」
- ・「一人ではすこしでもみんなでやるとこんなにもすごいのだと実感しました」
- ・「これからも一人ひとり『できることから』を忘れず、支援に取り組みたいと思いました」
- ・「これからも私たちにできることをやっていきたいなと思った」

ボランティアセンターの方々や、他のボランティアの方々を知り合うことで、遠くから来た人達と思いを共にすることを体験したことがわかる。また、ホテルの皆さんがあたたかく迎えてくれ、朝早くからお弁当を準備してくれるなど、協力くださったことが気力体力共に力になっていたこともうかがえる。普段は離れた場所にいる見知らぬ人達が顔を合わせて実際に協力すること、それぞれの「できること」が繋がって支援となっていくことを実感した。この経験から遠く離れた所であってもできることをやっていくことが、被災地の方々へつながっていくのだと感じているように思われる。

(4) まとめにかえて～被災地を「自分の目」で見、体感することの意義

前述したように、学生は震災の事実を多くのメディアを通して知っている。しかしそれは、ややもすると自分とは別の世界の出来事のような感覚にもなりかねない。しかし、被災地に赴き、実際に見る、触れる、嗅ぐ、聞くことによって、より現実となった様子がうかがえる。

そしてそれは、例えば、「私達が目で見たと、感じたこと、考えたことなどを他の人にも伝え、知ってもらうことが必要だと思いました」、「私がボランティアに行つて思ったことや感じたことを伝えていくことによって、被災地への理解を少しでも深

めていってくれる人が増えて（後略）」などの感想のように、被災地の様子や支援継続の必要性を「伝える」という意識へとつながっている。被災地を「自分の目」で見て、体感したことによって、この出来事をより身近なこととして、自主的・主体的に他の人へ伝えていこうとする気持ちの表れであろう。

学生は、幼稚園教諭・保育士、介護福祉士などをめざし、教育者・支援者として日々勉学に勤しんでいる。学校での学びにおいては「相手の立場に立った支援」といったことも念頭に置いていることだろう。この「相手の立場に立つ」という姿勢を保つことは、時として難しい。しかし、このたびの被災地での支援活動を通じて、ほんの少しではあるが「相手の立場に立つ」ことの体験をさせていただいたように考えている。「人の思いに、思いを巡らす」体験である。

日用品、写真、ぬいぐるみやランドセルなど、その場に残された私物の数々から、その物にかかわる人の気持ちに思いを馳せる、という行為。現実を直視し、想像力を働かせながら、その時その瞬間のその人の思いや残された人の思いなどを考える行為である。このたびの支援活動では、ほんの少しではあるが「相手の立場」ということ、「その人の気持ちに思いを巡らす」という学びをさせていただいたのではないだろうかと考えている。

4. 大学・短期大学が合同で取り組んだ意義

大学が開学4年目となり、3月に初めての卒業生を送り出そうとしている。この4年間、大学・短期大学双方に協同的取り組みの機会を模索してきたという経緯がある。学生の視点からみれば、大学祭が協同的取り組みの一つになるが、加えて、結果的には、この現地での支援活動が一つの大きな取り組みとなった。

未曾有の災害に世界が目を向けていることに、大学・短期大学として看過せず、学生とともにこの活動を実現できたことが一つの実績となろう。参加した学生たちは、現地に行った体験を深く心にきざんで、福祉・保健・教育等の世界に進んでいくことができるであろう。参加できなかった学生にも、報告集や学園祭展示などで、学園のボランティア活動の

様子を伝えることができた。展示では多くの学生から、共感の声があった。

一方、教職員も同様の気持ちであった。この活動では、教職員の方々からの物心にわたるお力添えをいただけた。大変な災害を前に、気持ちを一つにできたこと。これが、大学・短期大学にとっても、大きな意義ではなかったかと考えている。

5. 大学・短期大学としての意義・学園にとっての意義

東日本大震災は、多くの学生や教職員にとって、体験したことのない文字通り未曾有の大震災であった。「何かしなければ」という突き動かされるような気持ちで、学園傘下の各学校で震災支援活動が始まったように思う。ここでは、大学・短期大学から学園に視野を広げ、その意義について考えてみたい。

(1) 各校・園の特色ある支援活動の継続的展開

短期大学は、4月に予定されていた新入生歓迎も兼ねた「交流行事」を、被災地支援と災害時対応の活動に変更したことを皮切りに、様々な支援活動を展開してきた。2007年の新潟県中越沖地震に際して、地域介護福祉専攻の学生10名・引率教員2名が、柏崎市の被災高齢者施設でのボランティア活動等貴重な体験と、それを踏まえ、災害時対応を教育・研究課題として掲げ力を入れてきた背景があったことにもよる。

一方、植草弁天保育園では、教職員が一体となって、手づくり人形をたくさん作成し、被災地の各保育園等に送付を開始する。現地からの礼状等もいただき、交流を続けながら継続している。附属の2つの幼稚園では、募金活動を。附属高等学校では、校内募金活動の他、千葉市に避難している被災児童を対象に「がんばろう日本ー仲良し弁天小の子どもたちへ」と題して激励演奏会の実施、JR千葉駅前での義援金募集の「東日本大震災チャリティーコンサート」等を展開。秋の文化祭では、「災害時対応」を短期大学と連携・協力して披露するなど行なった。

こうした学園の各校園の取り組みは、大・短・附属校園の連絡調整を行う常務会や学園理事会等で情報交換されて周知され、学園全体で共有しながら進められた。

支援活動が学園全体に広がり、生徒・学生・教職員にとって、実際の状況に関わって、2度とできないであろう貴重な体験をし、今も継続していることに、大きな意義を感じる。

学園創設以来「徳育」を教育・保育の根幹として、心の教育を何よりも大切に、思いやりに満ちた共生社会の実現を目指している本学園にとって、こうした取り組みが展開できたこと自体に大きな意味があると考えられる。

(2) 「できるところから」からを合い言葉に物心両面からの支援が

学園としては、「できるところから支援します」を震災支援の合い言葉とすることが常務会で認められ、各校園のこうした取り組みを支えてきた。大学・短期大学の被災学生支援の基金募集、被災地への義援金や物資の募集、ボランティア活動への助成金等に関わって、「学友会」「後援会」「若葉会（教職員の会）」「同窓会」等の資金協力に加え、学生・教職員・保護者・外部の一般方々から資金カンパ・物資提供等をいただくなど、それぞれに「できるところから」の物心両面からの大きな支えがあった。こうした下支えがあつての、ボランティア活動等での震災支援の展開であった。震災支援に「できることから」を合い言葉・目標に、学園全体が一つになって取り組みとなったことに意義を見ることができると感じる。

(3) 良き伝統の礎に

震災支援の取り組みは、学生から「被災地でボランティアを」という声があがったことも実現へのきっかけとなった。「学生と共に」を大切に、それを支えながらの震災支援でもあった。震災支援活動で、教職員はもとより、学生や卒業生も含め、学園全体の気持ちが一つとなり、学園としてのまとまりをさらに高めることにつながったように感じる。今後の震災支援活動の継続も含め、学園あげての今回の取り組みの実績が、本学園の良き伝統の礎になるものと期待される。

6. 発展と展望

現地での支援活動は、その後、鴨川に避難している障害関係施設の利用者とその職員への支援活動にも発展していった。最後に、このボランティア活動

の概略に触れ、今後の展望について述べて本稿の終わりとした。

(1) 「鴨川青年の家」における支援活動について

千葉県立「鴨川青年の家」には、東京電力福島第一原発の警戒区域から集団避難している知的障害児・者279名がそこでの生活を余儀なくされていた。新聞等でこの状況が報道されたことがきっかけで、ボランティアサークルが中心となり支援活動を開始した。この時、すでに後期を迎えており、多くの学生を募り、支援活動をするための日程確保が難しいことから、今回については、小単位での支援を開始した。まず、情報召集のため専攻科特別支援教育専攻の授業の一環として学生と教員が現地を訪問。この際、義援物資はもとより、心的開放を望んでいることから、先方にレクリエーションを提供させていただけないかと申し出た。先方の快諾のもと、ボランティアサークルが中心となり支援活動やレクリエーションの提供・義援物資・古着の運搬等を行った。レクリエーションでは、ボランティアサークルが運動会の企画・運営を、チア・ダンスサークルと卒業生がダンス披露を担い、利用者の方々をはじめ職員の多くの方々に喜んでいただいた。また、学園祭では専攻科学生が義援金の募金を目的に、キャンドル作りと販売を行い、売り上げを先方に届けることができた。ごく一部であるが、学生の声、福島県福祉事業協会からの礼状（抜粋）を紹介したい。

【学生の感想から】

施設職員代表の方から最後に「ありがとう」と言ってもらえ、全てを認めてもらえたように思えて涙が出そうになりました。同時に、心の底から運動会を実施してよかったと思いました。今まで自分の人生でこんなにも達成感を感じた事はなかったので、本当に忙しい日々でしたが一生懸命に取り組んでよかったと思いました。

【福島県福祉事業協会からの礼状から（抜粋）】

この度は、貴校の学生さんが企画し、ボランティア、運動会、ダンス等を実施に際し利用者と共に過ごしていただき深く感謝申し上げます。利用者から満面の笑みがあふれており、あのような笑みを見るのは久々でした。私達も皆様からの「元気」をたくさんいただき今後とも「福島に戻る」希望をあきらめることなく頑張っていく所存であり、一日も早く元の生活に戻ることが、ご支援していただいた方に報いるものと感じております。

又、皆様から心温まる支援物資をたくさん頂戴致し厚く御礼申し上げます。

運動会では、満面の笑みで一生懸命に参加されている利用者の姿に職員の方々の応援にも熱が入り、スタッフの学生共々一体感が生まれた。支援活動だけに止まらず、レクリエーションの提供として運動会やダンス披露など具現化したことは、学生の意欲に繋がり、大きな感動を味わうことができた。

特に義援物資や古着の収集においては、直接支援活動に参加できない学生や教職員がその思いを託すこともでき、学園全体としての震災支援活動の取り組みに繋がった。

また、学生たちは実際に現地に足を運び、支援活動やレクリエーションを行うことで、利用者の方々の笑顔とは裏腹に「福島に絶対に戻る」という声を痛みとして受け止めることができた。福島の方々の思いに寄り添い、一人ひとりが原発事故の問題を身近に感じられた活動となった。

(2) おわりに

学園傘下の各校園で震災支援活動が現在も行われている。

今年度、短期大学における交流行事を皮切りに様々な支援活動を展開してきた。

実際に被害が甚大な被災地に赴くことは、そこで暮らす方々にとって大切な生活の場ということを忘れずに被災地の方の気持ちに寄り添うことであった。さらには、運動会の企画・運営を実施し、レクリエーションの提供による心的開放を実践できた。

これらの貴重な体験は、学生たちの心に刻まれ、各々の専門の中に必ずや生かされていくことと確信する。

大学・短期大学は、「徳育」を根幹とする建学精神の下、社会に欠かせない人材を育成しており、理事長の言葉の中にも「人を思いやる気持ちを養い、人の役に立つことの深い喜びを知り、自らが豊かな心の持ち主になれるような教育を行う」とある。まさしく今回の震災支援活動の取り組みは、学園の伝統を実績に繋げたものとして意義が見出せた。今後とも支援活動を継続的に実施し、私たち一人ひとりが「できることから」に思いを寄せ、社会に貢献できる人材育成に寄与していきたいと考える。